

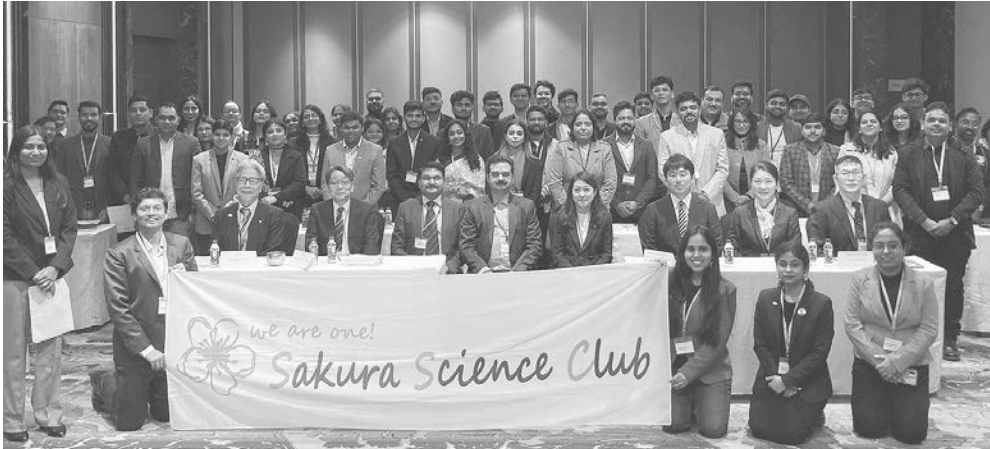
## 交流プログラム参加者が経験語る

## JST、さくらサイエンスクラブインド同窓会

科学技術振興機構(JST)は1月18日、国際青少年サイエンス交流事業「さくらサイエンスプログラム」の参加者から構成される「さくらサイエンスクラブインド同窓会」をインド・デリーで開催した。当日は在インド日本国大使館、インド科学技術庁(DST)からの来賓等を含め、81名の参加があった。

同窓会は、昨年2月の開催に引き続き6回目の開催となる。在インド日本国大使館の北郷公使、DSTのウメッシュ・クマール・シヤルマ部長から来賓挨拶があり、また、日印友好議員連盟会長の西村康稔衆議院議員からもメッセージが贈られ、JSTさくらサイエンスプログラムの伊藤副本部長が代読した。この日の同窓会では、同窓生4名からさくらサイエンスプログラムに参加した経験やその後の活動など発表があった。

一人目の登壇者であるインダス公立高校、ジンドに通う高校生のアンティム・ネヘラさん



在インド日本国大使館、インド科学技術庁からの来賓等を含め、81名の参加があったSSCインド同窓会

は、2024年に参加した高校生招へいプログラムで、東京大学、筑波大学をはじめと海洋研究開発機構、日本科学未来館を訪れた経験を共有した。将来的に日本で働くことは実現可能であるとし、文化的な背景からいくつもの乗り越えるべきものはあるとしつつも、ポジティブサイドに目を向け、この素晴らしい機会を生かそうと呼びかけた。

二人目の登壇者であるコチン・ユニバーシティ・オブ・サイエンス・アンド・テクノロジー修士学生のアナンヤ・ラビさんは、24年に新潟大学が一般公募で実施した国際海洋生物学のプログラムに参加し、現地でのサンプル採取やハンズオンによる自然科学に積むと共に、国際交流姉妹校による自然科学に関する国際会議(ICNS2024)において、口頭発表を行うなど非常に有益であったとした。

三人目の登壇者、インド工科大学グワーハル校の科学工学研究委員会ナシヨナルポストドクフェローのスミット・メヘタさんは、九州工業大学を訪問した経験を共有した。その経験を通じて自身の知識を強化すると共に、各国からの参加者と機械工学分野での知見を交えて交流する機会があったとした。また共同研究トピックの一つとして、インド北部の米における鉛汚染の悪影響の調査や断続的な流れが植物の根の成長にどのような影響を与えるかについて研究を進めていると語った。

四人目の登壇者である日本のTASデザイニンググループでチーフAIオフィサー兼研究者として働くバイハブ・ジータ・パンカジ・メヘタさんは、「知識の絆」と題して、2017年の横浜国立大学の実施プログラム「スマート構造工学技術の最先端に触れる国際サマースクール」への参加経験を共有した。日本での滞在は、自身の行動がどのように他者に影響を与えるかについて非常に学びが多かったと言及し、学び、冒険し、謳歌することの大切さを伝えた。

次に、再来日を目指す多くの同窓生に対して、東大インド事務所のインザカントリイ・プレゼンタティブのハルゲン・ルートウラさんは、自身も日本への留学経験があり、自身の経験を交えて、日本留学について具体的な情報を提供した。

参加者からは、「外国で学ぶということについて非常にクリアなイメージを持つことができた」「日本でのポスドクのポジションを探しており、今回のイベントはとても役に立った」「イベントの時間がもつと長いと、他の同窓生からももっと話を聞けると感じた」などの声が寄せられた。